

# 医療被ばく低減施設における 医療被ばく最適化への取り組み

1) 獨協医科大学病院 放射線部、2) 獨協医科大学 放射線管理センター、3) 獨協医科大学 放射線医学講座

福住 徹<sup>1)</sup>、村岡祐基<sup>1)</sup>、木村友昭<sup>1)</sup>、高嶋晟太郎<sup>1)</sup>、新井和浩<sup>1)</sup>、  
後藤和則<sup>1)</sup>、久保 誠<sup>2)</sup>、金田幹雄<sup>1)</sup>、杉岡芳明<sup>1)</sup>、曾我茂義<sup>3)</sup>

医療被ばく最適化の組織作りや方法は各施設で異なる。本稿では実際に行った最適化を通して当施設の取り組みや最適化について感じた事を紹介する。

The organizational development and methods of medical radiation exposure optimization differ from facility to facility. In this article, we would like to share what we felt about our efforts and optimization through the actual process of optimizing.

## はじめに

医療被ばく低減施設認定は、医療被ばくの最適化を客観的に評価する重要な基準であり、患者の安全を確保するために必要なものである。私たちの病院は、約2年間の準備期間を経て2015年3月に本認定を取得した。認定取得という成果は勿論のこと、準備していく過程で作り上げたものには成果を上回るほどの価値があると感じている。認定の必須項目には検査における患者の臓器線量データの拡充が求められており、これを整備したことにより医療被ばく相談体制が強化された。また、検査の根幹を支える検査マニュアルや医療安全マニュアルなどには医療被ばくにおける注意点や不要な被ばくを減らすポイントなどを盛り込んだことで医療被ばく低減に役立っている。医療被ばく低減施設認定を取得するための活動の趣旨が

最初からうまく伝わったとは言い難いが、徐々に浸透し最適な医療被ばくを考える文化が全体に広がったと思う。マニュアルを例にとると、2015年に初めて認定を取得した際にはマニュアルの改善はあまり進まなかったが、2020年に認定更新する際には見やすく分かりやすいマニュアルとなり大きく改善した。これは若手、中堅の技師が努力を重ね作成してくれたものでとても感謝している。この顕著な改善は医療被ばく低減に関する文化が醸成した結果が少なからず関わっていると感ずる。認定期間は5年であり更新の準備をすることで情報が刷新されるようになっている。当院では2020年に更新を予定していたが受審直前で全世界的な感染症のため訪院ができなくなり2年間保留となった。残念だった反面、実はもう少し補強しておきたかったマニュアル等もありホッとしたことを覚えている。

## 最適化を進める組織づくり

2020年の医療法改正により医療被ばく管理は大きく進んだ。全ての施設で法令に則った指針を作成し医療被ばく管理と最適化を行っていることと思う。2019年に発布された医政発0312第7号4(1)イをみると「線量管理とは、関係学会等の策定したガイドライン等を参考に、被ばく線量の評価及び被ばく線量の最適化を行うもの」<sup>1)</sup>と明確に記され医療被ばく管理のゴールは最適化であることが分かる。しかし講習会などで他施設の状況を聞くと「医療被ばくが診断参考レベル2020(Diagnostic Reference Levels 2020: DRLs2020)を超えていないことを確認する事」を最適化としている場合が多いことに気が付いた。「DRLs2020を超えないから最適化は満たされている」との判断かと思うがDRLs2020の上限値を超えて